

〈原著論文〉

## 浦島子の受容と変容

### ―文学源流と仏教潮流の合流―

原 雅子<sup>1</sup>

#### 要 旨

数多の浦島太郎研究がある。本稿において、文学源流に仏教潮流が合流し、浦島子から新たな展開を加え浦島太郎に成長していく文学の在り方を中心に論じていく。

キーワード 浦島子原話、助けられた亀、仏教と文学の合流、浦島太郎への成長、各時代の研究

#### 序

奈良時代『日本書紀』雄略天皇の条に、初見となる浦嶋子と大亀、すなわち女に転身し蓬莱山に共に到る項がある。中国種の色が濃い。継いで文学の世界で『万葉集』の浦島子では、大人の憧憬を異世界の海に虚構する。「龍宮」の名称は使われていない。亀は和歌に詠まれていない。

浦島子の話が仏教潮流と文学潮流の合流したところで日本の風土に溶け合い、浦島太郎となつて成長発展していく融合を拙稿における論点とする。平安時代に入り、助けられた亀が人命を救う仏教潮流の話は縁起として魅力的に語られ、文学の源流浦島子が仏教潮流と合流したかたちで、中世に入り浦島太郎として生き生きと助けた亀とセットで活躍する姿で出現してくる。

浦島太郎は一般の人々の生活に浸透、あるいは広域へ広がり普く知られていく。子ども向けの御伽草紙、一方では中世歌学の歌論、あるいは天皇制教化への論に用いられ、または芸能の主人公になるなど、様々多岐に渡るジャンルでの受容はめざましく、浦島太郎は龍宮、亀などとセットで出現してくる。江戸時代で特異なところは、学者(大人)が学問として注釈する国学に、文学の読み解きが窺える。さらに近現代に入り、明治の文部省唱歌、絵本などの多制作で児童向けの普及が図られ、普く幼少時から愛される浦島太郎の話として日本人の心に定着してきたといえる。

#### 一

水江の浦島子を詠む一首并せて短歌

春の日の霞める時に 墨吉の 岸に出て居て とをらふ見れば 古の  
事を思ほゆる 水江の 浦島子が 鰹釣り 鯛釣り誇り 七日まで  
家にも来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに 海神の 神の娘子に た  
まさかに い漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び 常  
世に至り 海神の 神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携はり 二人  
入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを  
世間の 愚人の 我妹子に 告りて語らく しましくは 家に歸りて  
父母に 事も語らひ 明日のごと 我は来なむと 言ひければ 妹が  
言へらく 常世辺に また歸り来りて 今のごと 遭はむとならば  
このくしげ 開くなゆめと そこらくに 堅めしことを 墨吉に 帰  
り来りて 家見れど 家も見かねて 里見れど 怪しみと そこに思  
はく 家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめやと この箱を  
開きて見れば もとのごと 家はあらむと 玉くしげ 少し開くに  
白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびきぬれば 立ち走り 叫び  
袖振り 臥いまろび 足ずりしつ たちまちに 心消失せぬ 若か  
りし 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶

えて 後つひに 命死にける 水江の 浦島子が 家所見ゆ

反歌

常世辺に 住むべきものを 剣大刀 己が心から おそやこの君  
(『万葉集』巻第九(長歌一七四〇番、短歌一七四一番))

上記、日本上代の『万葉集』長歌および短歌に詠われた水江の浦島子の話である(本来、万葉仮名表記である。が、拙稿では塙書房『万葉集』の漢字交じり平仮名本の読みを掲げる)。

浦島の原型のひとつの完全な姿を辿る一級資料といえる。

『万葉集』歌には、老いもせず、死にもせず「常世」「永き世」「常世辺」が海中に設定され神の宮とある。「海界」は海の神の心によってしか越えられない、現世との隔てであっただろう。なぜならば海神の娘子の誘いによって、浦島子は海界を越え海の宮に入ってしまったのである。現世の人の全く未知の、身分の高低いかに関わらず紛れ込めない禁域であったのだろう。万葉の和歌の世界には「龍宮」という名称は出てこず、「亀」も見当らない。

一介の漁師が海中の異世界を、現実から飛翔し異世界の神界に突抜けていく感がある。名もない庶民は浦島子という。この場合名前はまだない。生業は漁師である。浦島子は「海神の神の娘子」に誘われ海神の世界に入る。人間が現出し得ない輝かしい世界である。毎日生業をつつましく海を相手にする漁師であつてみれば海は宝庫でもあり、また時には天候や自然条件に左右される命を奪う対象でもある。その海に人間の想像しえない輝くばかりの世界が在り、その世界から特別に選ばれた人物であつたのだろうか、異世界に誘われていく浦島子の特異性が光る。

『万葉集』和歌に描かれた浦島子は、鰐釣り、鯛釣るという高級魚を釣り上げる威勢のよい、幸福を予感させる行動の若者である。

それゆえに浦島子は多くの漁師の中から選りすぐられた人物として造型され、海神の娘子から誘われ海界を突抜け海の宮へいくにふさわしい人間

であつたと考えられる。和歌に詠われたように若い美しい女神と結ばれ、至福の時間を共有するにふさわしい若い男子を想定させる。海神の娘子と浦島子とは海宮で「常世」という、現実には在り得ない時空を超えた世界での生活に享樂する。「架空の国」である。

文学の世界に虚構が、時空を越え、人間と海神の娘子とが恋で結ばれるというかたちで構築された。当時の名もなき人々の、食を得ることに汲々とし生業に追われる日々から、想像を絶する憧れの夢の世界を海の宮というかたちで具現した。和歌や文学などにことばを使って、人々が託し得る夢想の世界は虚構の中で成立し得たものである。浦島子の話は、世の男性が想い描く夢の世界を実現させる文学であつたといえるかもしれない。

享樂にあつた浦島子がふと父母を思う。『万葉集』の歌の作者は浦島子が現世の父母に会いに行きたい旨を打明けるくだりを「愚か人」と言い換える。父母の生きてある人間界に思いを馳せなければ、浦島子は永遠に海神の娘子と添遂げ生きることになったであろう。結果として、そういう選択を捨てることになってしまった浦島子に対して、「愚か人」の意味が込められたのである。妹(海神の娘子)に「しばらく家に帰り父母に語つたらすぐ明日にでも海宮に帰ってくる」と伝え、一時人間世界に戻り父母に語ってくる意志を妹に伝える。

この和歌の浦島子はちよつと父母に会い、すぐに戻るつもりでいた。しかし海宮の海神の娘子、妹は浦島子に箱「くしげ」を授け、決して開けないように注意を促し、人間界へ浦島子を送り出す。浦島子と海宮との秘密の特別の世界は並の人間の知るところとなるものではなかったと思われる。唯ひとり、選ばれた浦島子だけに許された異界への越境であつたろう。浦島子の父母へといえども語るべきものではなかった。その心配をせずとも、とくに父母はなく、想像もできない月日が過ぎていた。そのようなギャップに思い到るはずもなく、浦島子が妹から託された決して開けてはいけないと言われていた「くしげ」を開けてしまう。

浦島子が享受してきた海宮の現実と、父母のいる人間界の現実と、なにかを求めて思わず開けてしまった「くしげ」である。人間界の現実に一挙

に白煙とともに、時間を加えて戻されてしまう。

人間と神との境界を越え、いったん海の宮で生活を送った浦島子である。老いもせず死にもせずに神と同等の立場になり娘としての生活を享受してきた浦島子が、彼の意識から決して消えることはなかった人間としての行動を自由に取り得ると勝手に思い込んでいたことのように思える。一旦神の世界に身を置いた人間はなんらかの神の掟を自由に越えることは、時空を越えた禁忌に触れるか、あるいはとも言われぬ禁忌を犯すことを意味していたのかもしれない。

しかし、浦島子にはそのような意識は持ち合せていない。海界を越えて海の宮にやってきた時の若い男の意識のままであり、娘は禁忌の「くしげ」のなんたるかをそのくしげに込めて愛する浦島子に渡さざるを得ない、宿命であつたろう。人間の世界に、異界を越境したという意識や疑問も感じず、再び人間世界に戻るといふ浦島子に対して、海宮の娘、妹は浦島子が再びこの海宮に戻っては来ることは許されない運命と悟っていたのであろう。

浦島子の意識は人間のままであり続けた。異境の、神の世界のなにもにたるかに意識が及ぶ浦島子ではなかったといえる。万葉集歌人が想像する虚構の世界の神からは、馬鹿な人間、「愚か人」としか言いようのない呆れた人間とした。詠歌表現の文学としての完成度の高さに驚嘆させられる。

さらに浦島子の人間世界に戻ってからの現実が繰広げられる。禁忌の「くしげ」を人間世界の現世で開けてしまう。人間界の「常世辺」で何が起ったのか。われわれが避けて通れない老いから死へという具体性が刻銘に描写される。これが人間ののだと。青年から老年へ一挙に白い煙とともに転落する浦島子の不幸な転換である。この転換はおそらく海宮の神や娘子には起こり得ないものだろうと推測する。

たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ  
たちまちに 心消失せぬ 若かりし 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も  
白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後つひに 命死にける

## 浦島子の受容と変容

後悔に地団太を踏む浦島子は、煙とともに見る見る白髪老人と化し、終には死んでしまう。太宰治は慈悲といい（『お伽草子』）、三浦佑之は海宮の神の悪意、復讐という（『浦島太郎の文学史』）。神と人間が同化してしまっているところに、悪意とか復讐というのは成立しよう。

確かに浦島子と海宮の娘は愛し楽しさを享受していた。が、禁忌の不可逆は許されない異界の浦島子と海宮の娘であつたとわたくしは考える。人間の現実とはむごく、対比する神宮の世界には不可逆の掟を体感する小さな老翁を現出させることになる。

『万葉集』に展開した浦島子が交わった海神の異界の意味世界の描写をその長歌短歌から読んでいった。日本の原型の一である浦島子の話、奈良時代のひとつの核になる原姿をとどめるものとして確認しておく。

## 二

わが国浦嶋子初見の『日本書紀』は次のごとくである。

廿二年秋七月丹波國餘社郡筒川入瑞江浦嶋子乗舟而釣、遂得大亀。便化為女。於是浦嶋子感以為婦相遂入海到蓬萊山。

浦嶋子が大亀を釣り忽ち女となり結婚し、蓬萊山（古代中国、神仙の住む神山）に到るというのである。『日本書紀』第十四雄略天皇二十二年（四七八）に見える。舟の浦嶋子が大亀を釣上げ、海でなく蓬萊山への話が七二〇年には記録されていた。

継いで八世紀末の『万葉集』では和歌に詠まれる。『万葉集』では亀は出てこないことは既述した。が、海で浦島子と大亀が結びつく土壌は『日本書紀』に辿れよう。亀が浦島子の話で龍宮へ橋渡しする要の役割を担う。亀と人をつなぐ話が存在してもよさそうである。

仏教潮流において亀と人間が互いに助け合う関係で出現し、仏教を説くのに分り易く有効な話として語られていく。次のような一例を見出し得る。



平安時代、摂津国総持寺は天皇勅願寺として建立され、総持寺「補陀落山」と本堂に掲げる由緒ある寺である。『万葉集』の浦島子が海宮神の娘に引かれて行った夢の世界、補陀落の世界と重なる場所であった。

助けられた大亀が人を救い観音菩薩を祀る寺として由緒が記される。史書『日本書紀』、文学『万葉集』などに、仏教の潮流が混入し一層、浦島子の核の話が時代を組み込んでいくのではないか。

平安時代宇多天皇の御世、仁和四年（八八八）総持寺創建、寛平二年（八九〇）二月四日落慶法要が営まれる。創建は藤原山蔭である。平安遷都の後、京都での都の守り吉田神社が創建された。都の守りをし、あるいは包丁式の祖として文化の守りにも尽力した人物であった。山蔭が祀られ、包丁式の儀式が毎年四月十八日に総持寺で実施される。衣冠束帯衣装で鯛を捌く包丁式の儀式のお目見えがあり、ついで抹茶・菓子などが山蔭に奉納される。建立当初から宇多天皇の聖駕を仰ぎ、順次花山法皇の時に勅願となり（九八四年十月譲位）、一条、後一条、白河、鳥羽天皇（一一二二年一月譲位）など歴代の天皇の聖駕を仰ぎ、勅願寺として広大な寺領を拝する歴史を有する。現在、西国第二十二番札所勅願寺の石碑が山門入口前に建つ。

総持寺の御本尊は、大亀の甲羅に乗り立つ。約一米五十厘の千手観世音菩薩は両手を合掌し、秘仏として祀られる。普段の公開はない。平成二十一年、西国二十三所結縁御開帳が五月一日から五月三十一日まで実施されるのにあわせ公開される。秘仏に接する機会を得た。普段は御前立ち御尊像を直に見、拝するのであり、その奥に本尊はおわすのである。総持寺は真言宗、空海を祀り御大師様の寺として、同時に観音霊場として「おしなべて 老いも若きも 総持寺の 仏のちかひ たのまぬはなし」の和歌が本殿参詣所上部に掲げられ、参詣者が絶えない霊場である。

時代の荒波を何度も潜ったとこのことで、元亀二年（一五七二）織田信長の戦火が窮乏を招いたり、現代は戦後第四高等学校今の大阪府立茨木高等学校が境内を借り勉強した碑が山門を潜った右手に建てられている。幾多の困難や戦火を経て今に到っている。

現在は学問的見地からの発掘調査も行われ、平安初期「創建時本堂基壇」として基壇用凝灰石や、江戸時代文化元年（一八〇四）「庫裏鬼瓦」などが境内にその歴史を物語っている。考古学の発掘物や瓦を焼いていた窯の古と、整備された美しい境内や庭木、錦鯉や亀が集う美しい庭池があり、参拝する者の心を和ませる。二十二番札所、かつ空海も併せ祀る信仰の場で参詣者は絶えない。

総持寺の縁起絵巻一卷が寺宝として伝わり、仏教、歴史上のみならず、国文学の分野から時代時代の文学性が刻まれ、時代の風を読み解けることになる。

仏教の教えと対象とする信仰の潮流は、藤原家の私的なエピソードを具体化し、絵巻化することによって、総持寺建立の意図を歴史に創り上げ、画期的に解いていった。

いじめられた亀が助けられて報恩のため、海に投げられ命を危うくした子を救い出し届ける話が絵巻に著される。

#### 総持寺略縁起

当寺は、大職冠鎌足公第八世中納言山蔭卿創建。本尊は、長谷寺観世音化現童子の御作、本朝無雙の霊像たる千手十一面の菩薩なり。

開山当初より、宇多法皇叡信殊に深く、聖駕臨幸あらせ給ふ。爾来一千有余年の星霜を経て、菩薩の威光赫奕日を新たに感じて感応益々掲焉なり。

開創の起因たるや承和年間開山の御父越前守高房太宰大式に任ぜられ、下向の途淀の穂積みに於て、漁夫等巨亀を捕えてその甲を穿たんとす。高房之れを視て「我等年来観世音を信仰す、今十八日は我に念願する所あり、その亀を得させよ」と、単衣一領を取らしめ、水中に放たしむ。かくて高房等翌朝纜（ともづな）を解かんとするに、稚き若君を「便事のため過つて水中に陥れたり」と乳母は泣き悲しめり。継母が若君を亡き者にせんとて、乳母を強いてその計に与みせしめし事、高房その所由を知らず驚き歎き痛悼限りなく、至心合掌して「南無観



世音菩薩我等が多年の恭敬信心を照覧あらせられ、今一度亡児の姿を見せしめ給へ。この念願成就する時は、必ず尊像を彫刻し伽藍を建立し安置し奉らん」と祈願を凝したり。然るに不思議なるかな、水中に陥られし若君は、巨亀の甲上に安座せるなり。嗚呼奇なる哉。感應靈驗高房ら深く肝に銘じたり。かくて太宰府に下着の後、大神御井と名く遣唐使有り。御香木を取るが為に、砂金千両を渡す。御井之れを諾し唐朝に良材を需む。時に清涼山東南方大江中に光を放つものあり。これを仏母院に寄進せるを聞き、懇請し砂金を施納して之を需む。然るに唐帝このことを聞き、堅く制禁を下して船に積むを許さず。御井之れに銘文を刻して海中に投じ心深く高房の宿願に報ぜんことを念ず。

其の後高房逝去す。彼の若君山蔭卿と称し太宰府の都督を拝す。居民言へらく「頃日この浦に一霊木漂ひ到りて毎夜光を放つ」山蔭卿その材を見るに、方形の栴檀にして周四尺八寸亡三尺六寸あり、亡父の需に应じて、海を渡すとの銘文を見て、驚異歡喜に勝へず。是に由つて先孝造仏の遺志を継ぎ日夜これを成就せんと念願す。其後任滿ちて帰京の途、当地に來たりて休息するに霊木忽ち重くして挙ぐるること能はず。山蔭卿念願すらく「斯の地、若し伽藍を建立して尊像を安置し奉るべき霊場ならば、必ず事を果さん霊木速に軽く挙り給へ」と挙ぐるに軽きこと旧の如し。その後早く念願を果さんとして、仏師を求むれども優秀の工人得ること甚だ難し。故に帰信する長谷寺觀音へ參籠し、冥鑑を仰ぎしに、夢むらく「卿早速下山の際、初めて逢ひたらん者こそ即ち然るべき仏工なれり」この靈告に歡喜し、早朝山門を出づれば、十四五才の童子に逢へり。容貌甚だ奇異なれども、疑惑を生ずるは邪見と思ひ、直に告ぐるに童子たやすく之れを諾す。童子曰く「此の造仏舎中堅く他人の出入を禁ず。一千日を期して尊像を彫刻すべし如法潔斎信心願主の調味を受けん」漸く三年の星霜を経たり。仁和二年五月曉天夢ともなく、うつつともなく空中に声あり。山蔭卿其の聲に驚き、急ぎ仏舎に往き扉を開いてその内を拝し見るに御丈三尺許りの千手觀世音龜の座に立たせ給ふ。実に長谷寺觀世音化現童子の彫刻せら

れ給ふ本朝無雙の尊像なり。歡喜益々深く崇信限りなく尊像を本尊として安置し奉れり。仁和四年二月四日山蔭中納言は報壽六十五才にして薨せられぬ。その三周忌の追福に七男七女同心協力し大伽藍を建立し、寛平二年二月四日落慶供養の儀を修す。斯かる開創の起因より当寺本尊は古来「児育て觀世音」と崇められ、その後花山法皇は西国第二十二番の霊場として叡信遊ばされ、元龜二年当国戦乱の際、織田信長の兵火に罹り、七堂伽藍十二僧坊悉く灰燼となれり。当時本尊菩薩は一日一夜猛火の中に立たせられ毫も火災を被り給はず。是を以て世に「火防觀世音」と仰き奉る。列聖の叡信公卿の帰敬庶民の渴仰世々深厚にして悲願殊に著し。

以上旧記の要を撮り其の概を記して略縁起とす。

#### （図と説明がある）

#### 縁起絵巻伽藍創建之段

高房公最愛の小児が水中に落とされ、亀に救われる図  
中納言、造立された千手觀音を拝する

千日間の供膳はそのままである

寛平二年二月四日落慶供養後の総持寺境内

奈良時代、神仙の浦島の話に、大亀が美しい女性に变身し浦島を誘った。しかし、一般に流布している浦島系の、浦島太郎がいじめられていた亀を救うことについて、三浦佑之氏は

管見によると、「浦島太郎」の嚆は「浦島太郎」という昔話は、「昔むかし浦島は助けた亀に連れられて」という尋常小学唱歌や国定国語教科書などで多くの日本人に親しまれているが、この話が、子供たちにいじめられていた亀を助け、お礼に龍宮城に連れていつてもらったという展開をとるようになったのは意外に新しい。

（『浦島太郎の文学史』五柳書院、一九八九年）

と、意外に新しいと考えている。

三浦氏の考証は諸資料に基づく「浦島太郎」の展開を記している。確かに記録された浦島系の話で助けられた亀が『御伽草紙』にあり中世に入っていることを確認し得る。

上記既述の『日本書紀』『万葉集』および総持寺縁起などから「助けられた亀」は仏教の潮流の中から浮上していることを発見し得る。奈良時代末から中世に到る間、亀が宗教の中であらたかな位置を確保し、天皇、僧、一般人の人々へ浸透し幅広い世界で信仰の対象とされていく事例が見出せることは意義深いとわたくしは考える。

助けられた亀は、人に報恩をもたらすものであるという、人物造型ならぬ動物造型が日本の中で出来上がっていった資料が仏教潮流から文学潮流へと混ざりあい確たる歴史文学を作っていく。

中世に到り、御伽草紙世界に醸成していく基盤は、総持寺縁起に見られるような、勅願としての天皇からの命があまねく世の中に浸透する経緯を与えたことは想像に難くない。

三浦氏説が助けられた亀の出現が意外に「新しい」といわれていたことを塗り替え、仏教の潮流との絡みで話が進展していく過程を考えるべきではなからうか。

浦島の子から浦島太郎への新たな展開としての刺激になったのではない。拙稿において、「助けられた亀」が呼び覚ます点を紹介したい。国文学からの指摘として、浦島子という核の話から時代の潮流を呑みながら時代の色を吸収しながら浦島太郎の話として順次出来上がっていく。この点は重要である。

総持寺縁起には藤原高房が浜で殺されそうになっていた大亀を救う。海に落ちたわが子が大亀の背に乗り救われて帰ってくる話である。

当総持寺創建以前に、山陰は京都の守りのため吉田神社を貞観年中（七九四〜八七七）に勧請している。

「総持寺縁起」は京都遷都と、藤原山陰と亀にまつわる話や、総持寺は勅願寺として庇護を受けるなどの力の入れ方を分かり易く歴史を縁起とし、

話をつくりながら顕彰していった。歴史を作り上げることをしたと考えられる。それによって、文学の世界にも新たな展開が導入され、現在の話の浦島太郎に近づく成長をしていく起爆剤のような話が髣髴として仏教の潮流に起こっていることは看過できない。

平安初期、助けた亀が恩に報いて子どもを助けたという話に因んで記録されている早い資料として注目できるであろう。

### 三

古代末から中世にかけて「浦島子」の諸説話について大部の資料および研究が存在し繰返し記述されている。分り易く特徴を四項に分けて考えてみた。

この時期の大きな特徴の一として、文学ジャンルの拡大がある。

史書、歌学書、歌論書、御伽草子、抄物、説話集、和歌集、連歌や芸能など中世に新たなジャンルにおいて、出現が変化を齎す。「浦島子」の時代の子としての把握やものの見方が新たな浦島子の読みを深め、享受者の知識層から一般層への広がりも含め出てくる。「浦島子」が漢文から仮名へ、日本の愛される話になる多様性が一挙に噴出すように出てきた時代と見てよいだろう。

十世紀初頭『続浦島子伝記』、十一世紀後半大江匡房編『本朝神仙伝』の「浦島子伝」、同末の史書『扶桑略記』、十三世紀初『古事談』。平安末（一一一年〜一一一四年）『俊頼髓脳』。鎌倉時代初の史書『愚管抄』、『和歌童蒙抄』に引用される。一一八三年藤原俊成『千載和歌集』巻十賀歌中で使用される。

中世の付け合い文芸すなわち連歌の発想を採り入れて読もうとする説がある（生井真理子「古事談——浦島子伝——」同志社国文学四十六号、一九九三年三月）。浦島子を例に、国史の格付けのために「時代を飛び越える浦島子の話」を天皇顕彰の具への読みである。中央の意識を反映した『古事談』は中央から地方への流行を促す。

その特徴の二として、特徴一の各分野での、享受層が中央の流行にとどま

らず一般層へと拡大していく。

また、天皇を擁護し公家藤原氏の劣りを強調する国史に、話として周知の説話、浦島子が公家のみならず一般の人々を教化するのに有効に利用される。『古事談』が説話の浦島子を天皇の擁護に結びつけ、当時の人々の共感を誘うのに、一役買うよう仕向けられた。

中央から地域広く浸透していく。能「丹後物狂」（世阿弥の復曲を二十一世紀に実施）、狂言「浦島」などの芸能の主題として語られる。浦島神社（宇良神社）に浦島子の祭祀、丹後地方にゆかりの話は多く伝承も『日本書紀』の上記の餘社郡からも辿れ、全国津々浦々にある。

第三の特徴として、輪廻転生が、一般に好感をもつて受け入れられるよう、「浦島子」が「御伽草子」の末尾や、美しく極楽浄土に誘うように変化させた話に変えられる。

浦島が幼童に転生する『古事談』、鶴に生まれ代わる『浦島太郎』（『御伽草子』）など、仏教の影響。中世の文学に仏教の影響が色濃く出ている。御伽草子に使われ、一般の人々や女性、子どもを強化するのに有効であったのである。浦島太郎という長男一般の名称で親しまれていくのである。

浦島太郎が玉匣をあけると「紫雲が西にたなびいた」（『古事談』『和歌童蒙抄』『水鏡』）とある。紫雲が西方にたなびくというのは、仏教において瑞雲に乗った釈尊が修行者を迎え極楽の西方浄土に連れ行くことを指し、目度い話になっている。

第四に荒唐無稽な浦島子の視点である。中世に入り学問ジャンルの拡大や仏教の輪廻転生、あるいは説話の中で天皇と公家の行動の正当性などを説くといった多様化が窺える。享受者は中央の流行から、一般の人々や女性、子どもと幅広い層に広がる。荒唐無稽な意外性や理解し易く教化できる話に変えて多様な視点で浦島太郎が流行し益々愛される話として伝わる可能性を携わった人々が加味していった。

御伽草子『浦島太郎』の中では、四季折々、浦島が姫と享受する四季の町が美しく描写され、平安時代に和歌や物語『源氏物語』で見せた日本の美を入手し採り入れ再現させていること微かに触れるに留める。が、このよ

うな描写も含め、仏教の潮流と文学の源流からなだれ込んでくる話とが底流で深く関わりつつ、新たな要素を加え文学として変容を見せて浦島太郎の話が随時形成されていく可能性の片鱗を垣間見せているのではないかと考える。

#### 四

江戸時代、歴史書において総持寺に関わる人物が次のように書かれる。

『大日本史』卷之一、百廿九

藤原山陰 左大臣魚名玄孫。「尊卑分脈。」父高房、越前守。山陰、齊衡、天安間、歴左馬大允、右近衛權將監、補藏人、叙従五位下、為備後權介。「公卿補任。」貞観中、遷右近衛權少将、「三代實録。」復補藏人、「公卿補任。」兼美濃守。尋叙従四位下、「三代實録。」擢藏人頭。「公卿補任。」兼右近衛權中將。及陽成帝立、奉仕太上皇。上表請賜本品秩、罷中將。不許。元慶元年、上表曰「姑山之下、既非多士之林・魏闕之前、自是群材之府。仍辞帝闕、請奉仙閣。而人願至切、天從未彰。伏願天恩、假以殊貸、停臣中禁八屯之將、終臣外州四年之秩。則上有成功之慈、下無忘恩之累。」詔許之。為右大弁、表辞不許。三年、又請解職、不許。尋拜参議、及檢校諸国班田。山陰領攝津。遙撰其事。仁和二年、從三位、任中納言、兼民部卿。「三代實録。」四年、薨、年六十五、「公卿補任、一代要記。」山陰建祠於吉田、以祭春日明神、至今崇奉相繼。「大鏡。」世傳山陰割魚鳥、時人称得包丁術。「藤原系図。」

子 藤原有頼

子有頼、從五位下、但馬守、公利、從四位下、但馬權首。遂長、從五位下、主殿頭。言行、正五位下、左近衛將監。兼三、從四位下、陸奥守。仲正、從四位上、左京大夫、摂津守。僧如無、大僧都、「尊卑分脈。」持律精苦、穎敏過人、宇多法皇酷重之。「源平盛衰記。」○十訓抄曰、山陰赴筑紫、見漁者捕龜將殺之。惱而買之放去。後攜嬰兒浮海。妻惡非己出、



與乳母謀、為誤失手墮海。頃之、一大亀負子兒而出、得不死。所謂兒、即如無也。盛衰記亦載此事、為所生母嘗放亀、與此少異。」如無子在衡、自有傳。

総持寺の縁起に出現する亀に関わる話が、上記『大日本史』の藤原有頼の項に出てくる。「総持寺縁起」では藤原高房とその子山蔭が亀の縁をもとに総持寺創建の縁起とするのである。

継母が子藤原山蔭を亡き者にしようと、船から落命を図り、気づいた父が神仏に祈り辛うじて山蔭の一命が亀によって助けられるのである。亀は高房によって嘗て助けられた恩に報いて、子山蔭を高房の元へ届けるという話である。

縁起に記され伝承されている話は、国文学の世界に、このような話がすでに平安初期にあったのだということ、貴重な一例となる。当時、このような寺の縁起は勅願の寺、あるいは札所として庶民の参詣によって賑わい、人々にも享受されていたことは想像に難くない。

文学研究分野から俯瞰するとき、文学源流に仏教の潮流が時代を映し出し自然に融和していき新たな展開を示す一例ともいえるのではないか。合流の妙と文学創造の一因が発生する妙を感じとつてもよいのではなからうか。藤原山蔭は中納言の折、貞観元年(八五九)平安京の鎮護神として吉田山に春日の四神を勧請し吉田神社を創建し割魚包丁術において歴史を飾る人物であり、さらには総持寺創建の歴史が人間ドラマを産んでいることは評価されてよい。文学ドラマとしてフィクション化されて一翼を担う役割を、寺という人々が集い、参詣や講話など開放された、話される場としての公開性をもつ仏教という祈りの中で、育まれてきた意味は大きいものがある。

藤原氏の奈良興福寺氏寺としての建立から、さらに京都に都の守りとして藤原山蔭の吉田神社の創建があり、勅願寺総持寺の創建はその「総持寺縁起」によると、山蔭と助けた亀の縁に由来する。

仏教の潮流に浮上してきた、亀を助けるという至極普通の話から、報恩

がもたらすあらたかなものへの享受が伝播し文学世界にも影響を与えていくものと考えられる。上記山蔭の話と、一介の浦島太郎の身に起こる報恩の妙がどこかであいまって、平安から鎌倉室町にかけて形成されていく御伽草紙『浦島太郎』への話として展開していくエピソードは国史という形で江戸時代に記録される。融合しながら日本の歴史文化が新たな進展をうみだすのである。

江戸時代、また国学の分野で言葉についての注釈が為された。江戸中期の国学者賀茂真淵は注釈「歸命本願抄言釋」(賀茂真淵全集第十二卷)の長歌の解釈でかくいう。真淵が僧からの依頼で注釈したものである。仏教を排斥する立場に国学は普通たつのでこの種の注釈は非常に珍しい。真淵は学者の立場から注釈を施し依頼者に応えている。

於曾ましてふ意也、こは心遅く、にぶき事也、万葉卷二に於曾能風流士(万二二六オソノミヤヒト)てふは心鈍(オソ)き雅人(ミヤビト)ぞと戯れてよめる哥なり、又巻の九に浦嶋の子が事を、常世べに(万一七四二)住べきものを劔刀己(ツルギタチオ)が心から於曾也是君(オソヤコノキミ)、この長哥に世の中の愚人之(シレタルヒトノ)といへる即愚鈍の事にて於曾と同じ、又山代の石田の杜に心鈍(ココロオソク)手向したれば妹に相がたき(万二八五六)、とも有にて、此於曾は心の鈍きをいふ事明らか也、然れば、己が心於曾きを自ら愧悪む事を於曾ましといふと知るべし、且、安と於は五十音を筋違に通はせいふ例なれば、おそましをあさましといふべしと思ひ成ぬ

浦嶋の子の判断を「心の鈍き」ゆえ、おのれの判断を愧じ憎むと後悔している状況と真淵は解釈し、三章の現代注の先蹤となるべき注を施している。

真淵の学問の姿勢は学問のために注釈を施すことを目的とし、牽強付会や荒唐無稽説を排除するなど、近現代学問の文献資料をもとに注釈へ継承されていくのである。核となる浦島子から浦島太郎へ変容し受容された古

代から古典における経緯を論じてきたものである。

## 資料一

### 文献一覧

- (一) 唱歌「うらしまたろう」作詞・石原和三郎、作曲・田村虎蔵、一九〇〇年『幼年唱歌』掲載
- ・尋常小学唱歌「浦島太郎」作詞・乙骨三郎、作曲者不明、一九一一年
- (二) 『お伽草子と民間文芸』(民俗民芸双書十二) 大島建彦、岩崎美術社、一九六七年二月二十日初版。一九七〇年三月二十日四版
- (三) 『浦島太郎の文学史——恋愛小説の発生』三浦佑之、五柳書院、一九八九年十一月
- (四) 『古代社会と浦島伝説上——浦島伝説の歴史的形成』水野祐、雄山閣、一九七五年
- (五) 『浦島子伝』重松明久、現代思潮社、一九八一年
- (六) 『浦島太郎は歩く』服部邦夫、青土社、一九八五年五月
- (七) 『御伽草子』下、市古貞次校注、岩波文庫、一九八六年
- (八) 『浦島太郎の馬鹿』立松和平、マガジンハウス、一九九〇年十月
- (九) 『日本「神話・伝説」総覧』〈愛蔵保存版〉宮田登、他、新人物往来社、一九九三年四月
- (十) 『浦島伝説の研究』林晃平、おうふう、二〇〇一年二月
- (十一) 『丹後半島歴史紀行』浦島太郎伝説探訪、滝音能之、三舟隆之、河出書房新社、二〇〇一年七月
- (十二) 『浦島太郎はどこへ行ったのか』高橋大輔、新潮社、二〇〇五年八月
- (十三) 『浦島太郎の真相』KAPPANOVELS、鯨統一郎、光文社、二〇〇七年五月
- (十四) 『日本のむかし話』浦島太郎ほか全十七編、坪田譲治、偕成社、二〇〇七年十一月

- (十五) 『古代史の謎未解決のあの事件あの人物の正体が次々と明らかに！』関祐二、PHP研究所、二〇〇八年
- (十六) 『浦島太郎の真相』鯨統一郎、光文社、二〇一〇年二月
- (十七) 『太宰治 お伽草紙』太宰治、(株)あるちぎん、一九八九年十月十四日
- (十八) 『浦島太郎』影絵の絵本、中谷宇吉郎、暮しの手帖社、昭和二六年刊のふつこくばん、二〇〇三年十一月
- (十九) 『うらしまたろう』松谷みよ子、偕成社、一九六七年七月
- (二十) 『うらしまたろう』たのしいしかけえほん、木村裕一構成、金の星社、一九九八年三月
- (二十一) 『うらしまたろう』ミキハウスの絵本、川村洋／文、湯村輝彦／絵、三起商行、一九八九年十一月
- (二十二) 『うらしまたろう』木島始、ブッキング、二〇〇八年五月、一九九七年刊の再刊
- (二十三) 『うらしまたろう あまのはごろも』じぶんで読む日本むかし話三、山下明生、偕成社、一九九〇年六月
- (二十四) 『うらしまたろう』フロレンス・坂出、チャールズ・イー・タトル出版、二〇〇八年七月
- (二十五) 『うらしまたろう』講談社バイリンガル絵本、かさまつしろう、講談社インターナショナル、日本文・英文、一九九六年六月
- (二十六) 『うらしまたろう』日本むかしばなし、いもとようこ、金の星社、二〇〇九年四月
- (二十七) 『うらしまたろう』日本名作おはなし絵本、那須田淳、宇野亜喜良／絵、小学館、二〇〇九年四月
- (二十八) 『うらしまたろう』はじめてのめいさくえほん、いもとようこ、岩崎書店、二〇〇九年九月
- (二十九) 『うらしまたろう』絵本むかしばなし、つぼたじょうじ、国土社、一九七九年
- (三十) 『うらしまたろう』むかしむかし絵本、おおかわえつせい／文・む

らかみこういち／え、ポプラ社、一九七七年

(三十一)『うらしまたろう』日本傑作絵本シリーズ、時田史郎／再話、秋野不矩／画、福音館書店、一九七七年

(三十二)『うらしまたろう』武井武雄絵本美術館、武井武雄／絵、横皓志／文、フレール美術館、二〇〇一年一月、再刊

(三十三)『うらしまたろう』子どもとよむ日本の昔ばなし二十四、おざわとしお／さいわ、まみやふみこ／さいわ、あべはじめ／え、くもん出版、二〇〇六年十一月

(三十四)『うらしまたろう』ほるぷの紙芝居、かたおかひかる／きやくほん、ほるぷ出版、ふるかわタク／え、かみしばい、ほるぷ出版、一九八三年

(三十五)『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎』関敬呉、日本の昔ばなし三、一九七九年

(三十六)『浦島太郎』新・講談社の絵本、笠松紫浪、講談社、二〇〇一年七月

## 資料二

### 参考資料

御伽草子の代表的なものも、寛文期までにはほぼ出そろい、物語文学は、近世の読者たちにとって身近な存在となっていく。先人たちの思いを込めた浦島太郎が現代では児童向け制作される。学生と共有する手がかりとして、一部分を紹介しておく(絵本の絵は紹介できず残念である)。各作家がどこに力点をおいて浦島の話の再構築していったかが窺えるので、煩雑ながら挙げておく。

児童向けの解説にも「浦島太郎」の噺がさまざまな受容変容を経た経緯をしのばせ、歴史という長い時間を潜り抜け熟成されていく様子を見ているのである。

(1) うらしまたろう(日本むかし話 文／松谷みよこ 絵／岩崎ち

ひろ 偕成社、一九八七年七月、一九八七年二月三十七刷

いわさきちひろは、独自の画風をつくり、多くの作品を描きましたが、一九七四年夏急逝しました。愛情あふれる、淡く叙情的な水彩画は、今も親しまれています。)

「この絵本について 松谷みよ子

浦島太郎という「ムカシムカシ、ウラシマハ……」という小学生唱歌を思いうかべられる方も多いと思います。

浦島の話がいちばん古く文献に残っているのは「万葉集」といわれていますが、ほかにも「日本書紀」「風土記」「御伽草子」、そして近くは幸田露伴、森鷗外、太宰治(※参考)などが、さまざまな浦島を書き残しました。また昔話や伝説として、いろいろなかたちの浦島が日本の各地で語りつたえられ、日本人の浦島にたいする共感の深さをしめています。

浦島説話の生まれた古代は奴隷制の社会でした。人びとはその苦しみ、悩みのなかから、しあわせな、年をとることのない安楽国を夢みました。それが天上の世界であり、籠宮である、といわれています。

しかし、ただ安楽国に遊んだだけなら、浦島はこのように愛されなかったでしょう。安楽国に安住できぬ人間の心、求めて苦しみ多い現世へ帰ってくる太郎の人間性、そこにもう一つ、人びとの共感があつたのではないかと思います。

この太郎の願いは、籠宮と現世とのずれのために打ちくだかれます。わかい太郎が玉手箱から立ちのぼる一すじの煙りとともに老人となるあたりすさまじさは、そのまま人生のきびしさにつながります。

わたくしは、各地に残された浦島説話をもとにして、この話をまとめました。幼い日、浦島の素材はかたちにふれることは、日本人の心を知るうえからも、人生を知るうえからも大切なことのように思います。岩崎ちひろさんの美しい絵によつて、その印象はさらに深くなることでしょう。」  
松谷みよ子……一九二六年生れ。児童文学者。『龍の子太郎』で国際アンデルセン賞受賞。

岩崎ちひろ……一九一八～一九七四年。絵本画家として多くの作品を残す。



詩情ある独特の画風は今も親しまれている。

本文

すると、とおいうみのはてから、なみがおとひめのうたをはこんできた。

あけてはいけないといったのに。あけてはいけないといったのに。

あなたのわかいのちを そのはこにしまっておいたのに。

たろうはないた。りゅうぐうがこいしく、おとひめがなつかしく、いつまでもはまべにすわりつづけていた。(おわり)

※参考 太宰治『浦島さん』

(太宰「孤独じゃない。野心があるから、孤独なんて事を気に病む」)

「ムカシムカシノオ話ヨ」長男太郎、妹十六、弟十八才。赤海亀を設定している。

「浦島は、乙姫のお部屋にも、はいった。

乙姫は、何の嫌悪も示さなかった。

ただ、幽かに笑っている。

そうして、浦島は、やがて飽きた。

陸上の貧しい生活が恋しくなった。

お互い他人の批評を気にして、泣いたり、怒ったり、ケチにこそこそ暮している。陸上の人たちがたまらなく可憐で、そうして、何だか美しいもののようにさえ思われてきた。浦島は乙姫に向って、さようなら、と言った。

「ドウシタンデシヨウ モトノサト

ドウシタンデシヨウ モトノイエ

ミワタスカギリ カレノハラ

ヒトノカゲナク ミチモナク

マツフクカゼノ オトバカリ

タチマチ シラガノ オジイサン」

貝殻の底に「希望」の星があつて、それで救われたなんてのは、考えて

みるとちよつと少女趣味で、こしらえものの感じが無くもないような気がするが、浦島は、立ち昇る煙それ自体で救われているのである。

年月は、人間の救いである

忘却は、人間の救いである

日本のお伽噺には、

このような深い慈悲がある。

浦島は、それから十年、幸福な老人として生きたという。」

(2) うらしまたろう 時田史郎再話、秋野不矩画、一九七四年三月第一刷、一九八七年一月第十一刷発行、福音館書店

わかもの、ごしきのかめ、びくのなかのぎつこさんびきとかめをとりかえた。

そのかがやきがおおきくなつて、うつくしいむすめがおおきなかめをしたがえてあらわれた。

たろうがきてみると、いえがあつたところにはくさがぼうぼうとおいしげり、いえはあとかたもなくなっていた。

たろうは、かなしさにうちひしがれ、おとひめのことばもわすれて、ふとたまたまこのふたにてをかけた。と……なからみすじのけむりがたちのぼり、たろうはたちまちはくはつのろうじんになってしまった。

(1)

(3) 浦島太郎

一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎―日本の昔ばなしⅢ―(株)岩波書店、編者関敬吾、一九五七年五月第一刷、一九八八年八月第三十四刷発行

「浦島太郎 ――香川県仲多度郡――

昔、北前の大浦に、浦島太郎という人がいました。七十あまつて八十に近い、一人の母親と二人でくらしていました。浦島は漁師でした。まだひとり者で、ある日、母親が「浦島よ、浦島よ、わたしが丈夫なうちに嫁をもらってくれ」「わしはまだ稼ぎがないから、もらつても食べさすことができません。お母があるあいだは、日に日に漁をして、このままで暮すわい」と、浦島はいいました。

やがて月日がたつて、母親は八十、浦島は四十の年になりました。秋のころは北風が、まい日まい日吹いて、漁にも行くことが出来ぬ。魚がとれないので金にもならぬ。そこでお母をたべさすことも出来ないようになりました。「明日は天気になればよいのに」と思つて、寝ころんでいました。空模様がいつの間にかよくなつていたので、とび起きて筏舟にのつて魚釣りに行きました。東が明るくなるまで釣つても魚は一つもかからぬ、これは困つたことだと思つてみると、日がよつたところに大きな魚が餌にくいつきました。いそいで上げて見ると、亀がかかつていました。亀は両手を舟べりへもたせかけても、なかなか逃げようとしませんでした。浦島は「鯛かと思へばなんだ、お前は亀だ。お前がいるからほかのは食わんのだ、はなしてやるから早くよそへ行け」といつて、亀を海の中になげこみました。

浦島はきざみ煙草でもすつてまた釣つたが、どうしても食いつかぬ。困つてみると、昼前に大魚が餌をくつたらしい手ざわりがしました。あげて見ると、こんども亀がかかつて来ました。「あれほど、よそへ行くように言つてあつたのに、魚はかからぬで亀がつれるとは、よくよく運がわるいものだ。」そうは思つたが、また逃がしてやりました。魚を釣らないと、帰ることも出来ないのです、辛抱して二刻ばかり釣つてみると、またなにか食うたものがありました。こんどこそ魚だろうと釣りあげてみると、やはり亀でありました。そこで、また逃がしてやりました。そうこうしているうちに、日が入りかけて来たが、いつこうに魚は釣れぬ。日が沈んでしまったので、帰つてお母にどういおうかと思ひながら、筏舟を押していると向うに渡海舟が見えました。そうして何の用があるのか、浦島の方へ

やつて来ました。浦島が舟をおさえると、向うの舟もおさえる、こちらの舟がふかえると、渡海舟もひかえる、そしてとうとう浦島が舟と並んでしまいました。渡海舟の船頭が「浦島さん、どうぞこの舟に乗つておくれ。竜宮の乙姫さまからのお迎えじゃ」といいました。「俺が竜宮界に行つたならば、あとにはお母が一人だけのころから、そんなことは出来ないよ」「お母には不自由なくしてあげとくから、この舟にお乗りよ」と、船頭がいうものだから、浦島はなに思はず渡海舟に乗りこんでしまいました。渡海舟は、やがて浦島を乗せると、海の中へもぐつて竜宮界に行つてしまいました。

浦島が行つて見ると、りっぱな御殿でありました。お姫さまはお腹がすいたろうといつて、浦島にご馳走をして、「二、三日遊んで帰るがよい」といいました。浦島も竜宮界へ来て見ると、乙姫さまやさしいな娘もたくさんいるし、着物を着かえさせてくれるしするので、おもわず竜宮界で三年という月日がたつてしまいました、そこでもういにやならぬと思ひ、乙姫さまにいとまごいをする、三重ねの玉手箱をくれました。そして「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」と、教えてくれました。それから渡海舟にのせて、ここの山の鼻みたようなところに舟をつけてくれました。浦島は、村に帰つて見ると山の相も変つてゐるし、岡の木もなくなつて枯れてゐるのもありました。「三年しか留守にしなかつたのに、どうしたことだろうか」と考えながら家の方へ行くと、わら葺の家に老人がわら仕事をしてゐました。その家に入つて挨拶をしてから、「浦島太郎という人間を知つてゐるか」とわがことをたずねて見ました。するとその爺は「わしの爺の代に、浦島という人が竜宮界へ行つたがなんぼ待つてももどつてこなかつたことがあつたという話だ」と、話して聞かせました。そこで浦島は「その人のお母はどうしたろう」とたずねると、とうの昔に死んでしまったということでありました。

浦島はわが家の跡へ行つて見ました。手洗鉢の石と庭の踏石だけがあつたが、ほかには何もなかつた。思案にくれて、箱の蓋をあけて見ると、最初の箱には鶴の羽が入つていました。もう一つの箱の蓋をあけて見ると、中

から白い煙が上がりました。その煙で浦島は爺になってしまいました。三ばん目の箱の蓋をあけて見ると鏡が入っていました。その鏡で顔を見ると、爺さまになっていました。ふしぎなことだと思って見てみると、さつきの鶴の羽が背中についてしまいました。

そこで飛び上ってお母の墓のまわりを飛んでいると、乙姫さまが亀になつて浦島を見て来て、浜へはい上っていました。

鶴と亀とは舞をまうという伊勢音頭は、それから出来たものだそうである。

(4) 絵本むかしばなし3 うらしまたろう(株式会社国土社、初版一九六八年九月、七版発行  
文／坪田譲治 絵／福田庄助

「あとがき 坪田譲治

うらしまたろうは、ももたろうや、かちかち山などとならんで、わが国で代表的な伝承童話の一つです。このおはなしは古くから伝えられ、『日本書紀』や『丹後風土記』などにも、浦島のことが見え、また、奈良時代に書かれた『浦島子伝』という本もありますから、わが国では古くから、このおはなしにふかい関心がよせられていたことがわかります。

このおはなしは、動物をたすけること、そのおんがえしに、ふしぎな国に案内されること、そこで玉手箱をもらうが、約束をやぶったために、白髪のお爺にあつています。このようなおはなしは、ふつう仙郷淹流説話とよばれていますが、三年とおもったのが、ほんとうは、三百年だったというふしぎな国、この仙郷こそ、むかしの人たちにとって、極楽理想の国であつたことをものがたっています。

このおはなしは、古くは『浦島子』といわれていましたが、『御伽草子』のころから、『浦島太郎』とよばれるようになりました。

その後も、たくさんの文芸作品の題材となり、ことに戦前、小学校国定教科書で教材としてとられて以来、日本じゅうの人びとにしまれてき

ました。

このように、千数百年もの長い間、多くの人びとに親しまれてきたこのおはなしは、それだけに、日本人のいのちがしみこんでいるといえましよう。」

本文

たろうはしかたなくありつたけのおかねをだして、そのかめをかいとりました。

たろうがそれをのひらにのせてみますと、ふつうのこがめとはちがつて、ごしきにかがやくとてもかわいいかめでした。(略)

おくには、きんのかんむりをつけたりゅうおうが、すわっていました。

りゅうおうは、たろうをみると、たちあがつてむかえました。「うらしまたろうどの、よくきてくださった。むすめのいのちをたすけてくれて、ありがとう」(略)

「このたまてばこは、わたしがいちばんたいせつにしていたたからものです。これさえあればあなたはまたりゅうぐうにおいでになることができます。けれどもけつしてふたをあけてはいけません」(略)

たろうはたまてばこのふたをあけました。ふしぎなことに、ひとすじのけむりがたちのぼりました。

そのとたん、たろうのあたまのかみは、まつしろになりました。そして、たろうはへなへなとしやがみこんでしまいました。ちからがつきはてたのです。

どこからかおんがくがきこえてきました。「あ、りゅうぐうのおんがくだ」たろうはそうおもいました。しかし、そのおんがくもいつかきこえなくなつてしまいました。(了)

(5) うらしまたろう(文／大川悦生 絵／村上こういち、ポプラ社、一九六八年四月第一刷、二〇〇一年四月、第四十二刷  
「すいせんのことば 関敬吾



むかし話は人類の生活とともににはじまる。その内容はことごとく、人間の生活の現実とその可能性である。むかし話で語られるいろいろな事件は、日常の生活のなかにあり、かつ人びとの希望でもある。

「今昔物語」の作者は、多くの民話を「今は昔」ということばではじめたが、これは「今も昔も」ということを意味したのではなかったか。というのは人類の永遠にかわることはない、永続する生活を民話は語っているからである。

可能性ということは時には空想ともとれる。だが月の中の三本脚の鳥ももちをつくさぎも近い将来に捕らえうるという可能性を疑う現代人はもう一人もあるまい。むかし話は現実の生活を可能性の世界とを素朴に語ったものである。

ポプラ社の「むかしむかし絵本」が、日本につたえられている民話、童話、むかし話を、日本人の生活と可能性という面からあらためて見なおそうとする企画であり、それぞれの執筆者もそれにふさわしい新進であると聞いて、おおいに期待しているところである。」

本文

そろもうみもくれていた。はて、こんやはどうしたものか、たべものでもないが……たろうはとぼりとぼりかえりかけた。

そのときであつたそう。うしろで、「もしー」とこえがする。ふりむくと、みたこともないうつくしいひめが、ぼつとなみのうえにあらわれた。「ただいまはかめをたすけてくださつてありがとうございます。りゅうじんさまがよろこばれ、あなたをぜひにというておられます。さあ、おいでくださいませ。」ひめはころものすそをひるがえし、白い手をのべた。と、大きなうみがめがたろうのそばへおよぎよつて、せをむけた。(略)

たろうはほおづえをついてかんがえた。すると、たべきれないごちそうも、まいひめたちのまいも、ちつともたのしくなくなった。「あのしおかせはきもちがよかった。くろうしてとつたさかなはおいしかった。そうだ、びんぼうでもいい、にんげんのせかいへかえろう。」たろうはじつとしておれなくなつて、おとひめにうちあけた。

たろうはよろめきながらたちあがると、うみをみた。

とおくすぎさつた、わかい日のことをおもつた。そこへなみがざんとうよせてきて、からになつたたまてばこをさらつていつてしもうたそうな。

(一)

後書 「物語のかくされた意味 大川悦生

はじめに、ほくは、この話がもっている長いふしぎな生命というか、捨てざりがたい魅力というか、それはどこにあるのだろうかと考えた。

「浦島太郎」は、数しれぬ民話のうち、もつとも古い話のひとつである。奈良時代にできた日本書紀、風土記、万葉集などに、「浦島子」としてのっているから、すくなくも千二百年はたつ。ある学者は、五、六世紀までさかのぼりうるといい、中国の「仙界思想」の影響をうけて、この話がたんじょうしたと説く。

とすれば、そのむかしむかしに、すでに現世の苦しみをのがれて、不老不死の安楽境を夢みないではおれなかつた社会生活があつたのだろう。また、長いあいだに、社会のしくみや文化やらが移り変わつても、なおかつ、この話に思いをたくさずにはおれなかつた民衆の暮らしがあつたのだろう。

しかし、そういうありきたりな説明ではすまされないし、今日ばかりがこの話をみつめなおし、再話して、子どもたちにあたえる根拠としても、ものたりない。

かめをたすける件は、竜宮(仙界)へおとずれるための単なる話のきつかけだと思ふ。たまてばこをあげたら、白い煙がたちのぼつて、みるみるしらがのじいになる(あけなければよかったと思わせる)のは、単なる話のしめくりだと思ふ。千何百年ものあいだ、日本人の心のかたすみに住みついて忘れようとしなかつた「浦島太郎」のひみつ、あるいは、真の主題は、もつと別のところにあつたはずである。

こう考えると、ぼくには、この素朴な話から、つぎのふたつの意味をひきだせる。

(一) きっかけがどうであるにせよ、浦島太郎は、だれもたずねあてたことのない海のかたの仙界へおとずれる。そして、話の結末ではしらがのじいになるにせよ、現世のわずらわしさを忘れ、三百年も生きのびることができた。浦島太郎は、めったに果たせない夢をはたしたしあわせ者であったのだ。そのかぎりでは、いつの時代にも苦しみのたえなかつた民衆ばかりでなく、都人や権力者たちにさえ、ほのかなあこがれをいだかせてきた。(それが、いちはやく文献に書きとめられ、繰り返し書きかえられて伝わってきた理由であるかもしれない。)

(二) この反面、浦島太郎は、竜宮での暮らしにあきてしまい、いま一ど現世の苦勞のおおい生活へたちもどりとなくなる。乙姫がひきとめるのをふりきり、やもたてもたまらず、自分の意志で帰ってくる。どんなに苦勞がおおくても、みずからの手と汗で、ものを採り、造り、育てて暮らすことこそが人間の人生だ。それをはなれて、ほんとうにみちたりすることはない、という考えがかくされている。仙界の生活は、うらがえしていえば、三百年を三年と思いちがえるほど実のない空しいものだった、ともいえる。かわりはてた村へ帰り、しらがのじいになった自分に気づいたときのためいきは、なにをあらわしているのだろう。竜宮へいったがために、もつと実のあるべき一どきりの人生(青春)を失ってしまった、そのためいきもまじっているような気がする。

「浦島太郎」には、じつは、こうした両面の意味が、二重うつしにこめられていると、ぼくは思う。

みな、幼いころは、ふつうの楽しい昔話として聞いただけだった。が、日本人の心のかたすみかに影絵のようにのこつて、おりにふれ、二重うつしの意味をこもごも思いうかばせる――それを、「たすけたかめにつれられて」といい、「あけてはいけないたまてばこをあげたら」という、だれにも親しみやすい道具だてとプロット(筋)で語ったのが、民話「浦島太郎」なのである。

ひとつの物語としてみると、この話はなんとも単純で、ひだが乏しく思われる。民話固有の繰り返しもなければ、「かちかち山」や「かにむかし」

のような葛藤もないし、また、夢の世界を語っているくせに、ひどくきまじめである。

正直なところ、こうした民話は、ぼくらにとっていちばん再話しにくい。けれど、なんとも単純で葛藤もない話のなかに、いまいったような二重うつしの人生の意味を語りこめているという点では、ぼくらの祖先がうみだし伝えた民話の傑作といえる。そして、それだから、ただの絵ばなしやあらすじだけの「うらしま」でなく、今の子どもたちも、よりよい「うらしま」を「うらしま」を読み聞きさせたい気がする。

さて、ぼくはこの絵本の再話をするにあたって、かならずしも、いままでのありきたりなプロットにしたがわなかった。

千何百年ものあいだ、語りつがれ、書きつがれてきた「浦島太郎」は、いろいろに変化している。ことに、口づたえの民話では、ずいぶんかわった、おもしろい語られ方があり、沖繩のある島の話など、おかへあがつてきた乙姫と若者が結婚してわかれ、しばらくすると、生れた子どもが海底から若者をよびにくるというふうに語っている。

ぼくは、これらの類話を読みくらべたうえで、ぼくなりの方法で書いてみた。たとえば、おかねを子どもにやって、かめをたすけるよりは、とつた魚ととりかえるほうがしぜんではなからうか。また、たすけたかめが口をきいて、「浦島さん、竜宮へ。」というよりは、南の島々の話のように波間からポツと姫(または男の使者)があらわれて竜宮へあんないするほうが、イメージとしても美しいのではなからうか。

(6) うらしまたろう(時田史郎再話、秋野不矩画 一九七四年三月第一刷、一九八七年一月第十一刷発行、福音館書店)

本文

わかもの、ごしきのかめ、びくのなかのざっこさんびきとかめをとりかえた。

そのかがやきがおおきくなって、うつくしいむすめがおおきなかめをしたがえてあらわれた。

たろうがきてみると、いえがあつたところにはくさがぼうぼうとおいしげり、いえはあとかたもなくなっていた。

たろうは、かなしさにうちひしがれ、おとひめのことばもわすれて、ふとたまたまこのふたにてをかけた。と……なかからみすじのけむりがたちのぼり、たろうはたちまちはくはつのろうじんになってしまった。

(丁)

(7) うらしまたろう あまのはごろも(山下明生/作、石倉欣二/絵、一九九〇年八月初版一刷、(株)偕成社、自分で読む昔話三)

わかりやすく、おもしろくて、わくわくするむかし話。

子供たちは、祖先の知恵がいっぱいつまっているむかし話が大好きです。

長い年月、語りつがれてきた祖先からのすばらしい贈り物を、じぶんで読みはじめた子供(たち)によませてあげて下さい。

解説 山下明生(はるお) 京都大学仏文科卒業、一九三七生れ。

日本の昔話でなにがすきかときかれたら、わたしは第一に「浦島太郎」をあげます。このお話の時間と空間のスケールの大きさが、なんともいえぬ魅力です。まずしい漁師浦島がカメをたすけたお礼に竜宮城に案内され、夢のような三年間をおくったのち玉手箱をみやげに故郷にかえると、この世の七百年がすぎた、というふしぎな物語は、海辺で育ったわたしの心をつよくゆさぶりました。

海の彼方に竜宮という極楽浄土を夢想する人たちは、各地の浜辺にいつの時代にもいたのでしょう。沖縄の島じまにも、ニライカナイというあこがれの土地がいつたえとしてのこっています。妻を娶れない若者が、そのような浄土にみたされぬ夢をたくすのも、自然のなりゆきでしょう。

「浦島太郎」の物語は、たすけられたカメが恩返しをするという報恩説

話として有名ですが、この「うらしまたろう」では、四国・香川地方の浦島物語を骨子に、人間のあこがれやむなしさなどを、鮮明にとらえるようにこころみてみました。カメの背中ではなく乙姫の舟に案内されて竜宮へいくのも、その意図にそつています。

浦島伝説は、古くは「日本書紀」「万葉集」にもみられ、近世になつても舞踏劇や長唄などにもとりいれられています。いろんなジャンルにとりあげられているところからみても、私たち日本人の心の奥ふかくに根ざした民族的な昔話といえるでしょう。

この本ではもう一つ、海辺につながる昔話として「あまのはごろも」をえらびました。このお話も、「うらしまたろう」とどうよう妻のない貧しい農夫の物語です。月夜の松原に舞いおりた天女たちが、羽衣を松の枝にかけて水あびする情景には、子ども心に胸おどらせたのをおぼえています。天女の舞いが美しければ美しいほど、ぜがひでも彼女を地上にとどめておきたかった若者の心情が、いじらしくもまたあわれです。

羽衣伝説には大きくわけて三つのパターンがあり、第一は老夫婦が羽衣をかくして天女をわが娘とするもの。第二は天女が、羽衣をかくした男と夫婦になり、やがて羽衣をみつけて天にかえっていくもの。第三は天にかえった女をおつて男も空にのぼり、たなばたの牽牛星と織姫星になるというものです。これらのお話は「天人女房」「羽衣伝説」などいろんな呼び方で、青森から沖縄まで津々浦々にひろまっています。

ここでは「うらしまたろう」とのバランスも考慮して第二の形を物語にまとめました。沖縄・奄美地方につたわる物語を下敷きにして、男女の機微、親子の情愛などここでもまた人間の心のドラマを中心に再話しました。この第二の形の結末も、父と子どもたちがあとをおつて天にのぼっていくものや、地上にのこつてりっぱに出世するものなど、いろんなバリエーションがみられます。(丁)

(8) 武井武雄絵本美術館 うらしまたろう(著者武井武雄・榎皓志、



(株) フレーベル館、二〇〇一年一月初版第一刷発行)

本文 ひのくれたはまべにたつてさびしくうたをうたいました。

かめの せに さ ゆられ

なみの せに さ ゆられ

さゆれ さゆれ しまの こ

とおく とおく うみの こ

うみの くには うなさかの

(略)

「知らないだつて? おまえがわすれたつきひか ふるさともはいって  
るのではないのかね」ひとびとのわらいごえをあとにたまてばこをだいに  
にかかえうらしまははまべにたちました。

なさゆれさゆれしまのこ……すべてがはるかにけむるまぼろしのように  
おもわれました。あけてはいけないたまてばこ。「でもふるさとおもい  
だせるかもしれない」うらしまははこのふたをそうとひらきました。と、  
たちのぼるけむり……

しろいしろいけむりがゆらゆらりとうらしまのからだをつつみました。

きゆうにうらしまのすがたもあたまでもしろうくなりおどろきかなしむそのこ  
えは

こう!きりさくようなつるのこえになりました。しろいつるになつたうら  
しまははばたくとあおいそらにまいあがりました。つるはなきました。こ  
うこうこう……なきながらうみをとびました。(了)

(9) 浦島太郎(新・講談社の絵本七、二〇〇一年七月第一刷発行、

文・構成 千葉幹夫／講談社、画 笠松紫浪、(株)講談社)「かぐや姫」

「桃太郎」「一寸法師」「浦島太郎」「猿蟹合戦」「かちかち山」「舌切雀」

「花咲爺」

横尾忠則 「浦島太郎」

今回出版される全作品をぼくは知っている。なぜか子供の頃わが家に  
あったのである。とここでこの中で特に気になるお話は『浦島太郎』だっ

た。絵が好きだったのは『桃太郎』の斎藤五百枝画伯のものであった。

『浦島太郎』の物語はぼくの中で『かぐや姫』と共に宇宙的な空想力に魅  
かれるのである。『かぐや姫』もそうだが近年浦島太郎が乗って籠宮城に  
行ったという亀が、実は宇宙船ではなかったのではという説もあって、急  
に現代の宇宙神話と結びつくのである。

まあこのことは別にしても『浦島太郎』は非常にロマンティックな物語  
として今でもぼくの作品のモチーフになっている。ぼくは時々、絵のモ  
チーフに『かぐや姫』や『桃太郎』や『鉢かつぎ姫』などの御伽噺から主人  
公を借用して作品を制作しているが、そんな時、戦前の「講談社の絵本」が  
大いに参考になっているのである。

特に浦島太郎は何度もぼくの作品のメインゲストの一人として登場して  
いる。ぼくが亀が大好きであるということと同時に、海の中の籠宮城の存  
在がたまらなく好きなのである。いつかぼくが浦島太郎に扮して大勢の乙  
姫様と一緒に写真を撮ったことがある。

そんなぼくには籠宮城は架空の場所ではなく、本当に実在しているよう  
な気がしてならないほど、ぼくの中ではリアリティを持っているのである。  
もちろん肉体で行ける場所ではない。けれども人間の霊格が向上すれば、  
魂によって行けるかも知れないとふとそんなことを空想してしまうのであ  
る。

現代の子供には御伽話などかつたるくてつまらないものに見えるかも知  
れないが、ぼくの世代の人間にはこんなたわいのない物語に何やら魅かれ  
るものがあって、いつまでも大事に心の中にしまって置きたい宝物のよう  
にキラッと輝く命を感じるのである。この「新・講談社の絵本」が今後も引  
き続いて刊行されることを強く望みたい。

解説「浦島太郎」

花部英雄 国学院大学講師

昔々浦島はノ助けた亀に連れられてノ籠宮城へ来て見ればノ絵にもかけな  
い美しさ

と文部省唱歌にうたわれ、また明治の末から戦後まもなくまで国定教科書  
(現在の「検定教科書」前の制度)にとりあげられてきた「浦島太郎」は、

学校教育を通じて全国の子どもたちに教えられてきた。その影響もあつて、いまも多くの人々に記憶されている。この教科書の「浦島太郎」は、中世末期に出版された『御伽草子』の「浦島太郎」に基づいて書かれたとされる。ただ、『御伽草子』では玉手箱をあけた浦島は鶴となって飛び、竜宮の亀と一緒に浦島明神としてめでたく祀られるという結末になっており、その点が大きく異なっている。『御伽草子』以前にも歌や物語に数多くとりあげられるなど、海に囲まれた日本人にとって浦島太郎は、なじみの深い説話といえる。

ところで、浦島太郎のおもしろさはなんといっても、海中の樂園である竜宮城を訪問するところや、玉手箱をあけたとたんに白髪のお爺に変身するところにある。空想的で謎に満ちたこの部分が、強いインパクトをもって記憶されているはずである。ただ、奈良時代に記された『丹後国風土記』逸文（一部残った記録）では、海上に浮かぶ霊山の「蓬莱山」に赴くことになっており、また『御伽草子』でも海上かたにある「竜宮城」を訪ねるなど、海中にもぐっていくところはない。中世以後の変化によるものである。

さて、『御伽草子』の竜宮城で、浦島は「四方に四季の草木」がある部屋に案内される。東の戸を開けると春の景色の中に草花が咲き乱れ、南は夏の草花、西は秋、北は冬の景色や風物が、それぞれ繰り広げられる。部屋の四方が張る夏秋冬の季節に囲まれているということは、見方を変えれば、季節が停止して流れないということである。暦や時計のないところでは、季節の変化によって時の流れを感じるものである。ということとは、竜宮城には時間が流れていないということを暗に示しているのではあるまいか。

この「無時間」は、乙姫の贈る玉手箱からも読みとれる。竜宮城で三年を過ごして故郷へもどると、すでに三百年（『御伽草子』では七百年）の時間が流れている。玉手箱は地上と海底のこの時間差を封じ込めたもので、その封印を解くことによって時間は一挙に早送りされて、たちまちに浦島は年老いてしまうという仕掛けになっているのである。海中と地上と異なる

世界も同様である。「天の一日地上の一年」といった言葉に代表されるように、地上と異界では時間の流れが大きく異なるのである。この絵本では、十八頁から三十五頁が「無時間」を表している。四季の花々や果実が、一堂に咲き、実っていることから、時間は停止し流れていないのである。その意味では、浦島太郎の昔話は異時間の海底（異界）を旅し、そこから還ってきた話といえる。

ところで、無時間を示すこの絵の中で、サンゴの椅子に腰かけ庭を眺めている浦島のいる縁側は、大理石の床、柱で造られた、中国風の立派な御殿である。他にも乙姫や侍女の服装、調度類、建築様式などすべて中国風である。これと対照的なのが浦島の身なりで、波模様の小袖に腰蓑、脚絆姿の日本的な漁師の格好である。蓑の腰蓑は、漁労にたずさわる人の作業衣であり、脚絆は臍を傷つけないためのものである。『御伽草子』に描かれた浦島の絵も腰蓑姿の格好に、釣り竿と魚籠をさげている。日本風は服装以外にもある。冒頭の浦島の家や浜辺の様子、竜宮から帰ってきた浦島が目にする荒れ果てた故郷も、「白砂青松」のなつかしい日本の漁村の風景である。異国の竜宮城と対比させた描き方といえる。

(一〇) うらしまたろう(子どもとよむ日本の昔ばなし二十四、二〇〇六年十一月初版第一刷、再話小澤俊夫・間宮史子、絵安部肇、くもん出版)

この昔ばなしは山形県で語りつがれていた「浦島太郎」（『佐藤家の昔話』武田正編 桜楓社 収載）をもとに再話しました。

昔ばなしはわたしたちの祖先が何世代にもわたって語りついできた文化財です。

語りつがれてきた昔ばなしには、子どもたちの心をひきつける力があります。昔ばなしは、語りやすく耳で聞いて覚えやすい語り口で語られます。その特徴を生かした「子どもとよむ日本の昔ばなし」をお子さまとお楽しみください。

結末句について

昔話では、お話の最後に「どつとはらい」「これでえんつこ もんつこ  
さけた」などと語られますが、この言葉は結末句とよばれています。これ  
は、「これでおとぎばなしはおしまい」というあいさつです。

(本文末) とんぴんからりん すっからりん(了)

#### 浦島太郎

##### 〔編集〕歴史

丹後国『風土記』（現在は逸文のみ）にある浦嶋子の話「二」が原型である。  
他に『日本書紀』『万葉集』にも記述が見られる。「浦島太郎」として現在  
伝わる話の型が定まったのは、室町時代の『御伽草子』による。その後は良  
く知られた昔話として様々な媒体で流通することになる。  
竜宮城に行つてからの浦島太郎の行状は、子どもに話すにはふさわしくな  
い内容が含まれているので、童話においてはこの部分は改変されている。  
これは、明治時代に国定教科書向きに書き換えられたためである。

##### 『万葉集』巻九による話

##### 『万葉集』巻第九（長歌一七四〇番、短歌一七四一番）

水江の浦島子を詠む一首并せて短歌

春の日の霞める時に 墨吉の 岸に出て居てとをらふ見れば 古の 事ぞ  
思ほゆる 水江の 浦島子が 鰐釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも来  
ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに 海神の 神の娘に たまさかに い  
漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の  
神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携はり 二人入り居て老いもせず 死  
にもせずして 永き世に ありけるものを 世間の 愚人の 我妹子に  
告りて語らく しましくは 家に歸りて 父母に 事も語らひ 明日のご  
と 我は来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常世辺に また歸り来て  
今のごと 遭はむとならば このくしげ 開くなゆめと そこらくに 堅  
めしことを 墨吉に 歸り来りて 家見れど家も見かねて 里見れど 怪  
しみと そこに思はく 家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめや

とこの箱を 開きて見れば ものごと 家はあらむと 玉くしげ 少し  
開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびきぬれば 立ち走り  
叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ たちまちに 心消失せぬ 若か  
りし 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて  
後つひに 命死にける 水江の 浦島子が 家所見ゆ

##### 反歌

常世辺に 住むべきものを 剣大刀 己が心から おそやこの君

##### 〔編集〕『御伽草子』

浦島太郎は丹後の漁師であつた。ある日、釣り糸に亀がかつたが、「亀  
は万年と言うのにここで殺してしまうのはかわいそうだ」と逃がしてやる。  
数日後、一人の女の人が舟で浜に漕ぎ寄せて自分はやんごとなき方の使いと  
して浦島太郎を迎えに来た。姫が亀を逃がしてきて礼をしたい旨を伝え、  
太郎はその女の人と舟に乗り大きな宮殿に迎えられる。ここで姫と三年暮ら  
し太郎は残してきた両親が心配になり帰りたいと申し出た。姫は自分は実  
は太郎に助けられた亀であつたことを明かし玉手箱を手渡す。太郎は元住  
んでいた浜にたどり着くが村は消え果てた。ある一軒家で浦島何某の事  
を尋ねると近くにあつた古い塚がその太郎と両親の墓だと教えられる。絶  
望した太郎は玉手箱をあけ、三筋の煙が立ち昇り太郎は鶴になり飛び去つ  
た。

##### 〔編集〕『御伽草子』の系統による話

浦島太郎は漁師だつた。ある日、浦島太郎は子ども達が亀をいじめてい  
るところに出くわした。浦島太郎が亀を助けると、亀はお礼に竜宮城に連  
れて行つてくれるという。浦島太郎は、亀に跨（またが）り、竜宮城に連れ  
て行つてもらつた。竜宮城には乙姫（おとひめ）様がいて、浦島太郎を歓待  
してくれた。しばらくして浦島太郎は帰りたいと乙姫様に申し出た。乙姫  
様は引き止めたが、無理だと悟ると、玉手箱を「決してあけてはならない」  
として、渡してくれた。浦島太郎が亀に跨り浜に帰ると、浦島太郎が知っ

ている人は誰もいなかった。おかしいと思いつつ浦島太郎が玉手箱を開けると、中から煙が出てきた。そして、その煙を浴びた浦島太郎は老人になつていた。竜宮城で浦島太郎が過ごした日々は数日だったが、地上では七百年が経っていたのだ。

なお、浦島太郎のその後については諸説があつて定かではない。



The possessions and changes of Taro Urashima  
—The confluence between the origin of  
literature and the tide of Buddhism—

Masako HARA

Key words

The original tale of Urashimanoko, The helped turtle, The current of Buddhism and literature,  
The growth to Urashimataro, The studies of each age